

連載

【試論】民族総福音化への道 (2)
先ず早天祈祷から②

副総裁兼事務局長 手束 正昭
(高砂教会牧師)

私がまだ関西学院大学神学部の学生だった時の話である。私の指導教授は松村克己という方であった。大変な学者で、戦前、戦中は京都大学哲学部の助教授として、有名な宗教学者波多野精一の後継者と目され、その名を馳せた方であった。が、戦後所謂「京都学派」の占領軍による「パージ」に連座させられて、京都大学を追われ、再建されたばかりの関西学院大学神学部の教授として迎えられた。特に難解と言われたパウル・ティリツヒの「組織神学第三卷」(聖霊論)の講義は、今日の私の「カリスマの神学」構築に大いに役立った。

この松村教授が授業の中で次のようなエピソードを語られ、私には忘れ難い印象的なものとして残った。「キリスト教の牧師と仏教の僧侶を比較した場合、人格的にも学識の面でも牧師の方が上である。しかし、宗教家として見た場合、何故か僧侶の方が魅力がある。どうしてだろうと考えてきた結果、思い当たったことがある。それは、僧侶の場合毎朝欠かすことなく勤行を行なっていることである。しかし牧師の場合、それが無い。従って宗教家としての魅力も乏しくなる」と。

私はこの松村教授の語られたエピソードの真実さを今更ながら思わされるのである。日本の牧師と韓国の牧師とを比較しても、その差は歴然である。韓国の牧師には何か宗教家としての霊的権威

や力が備わっているが、日本の牧師にはそれが無い。人のよい小父さんという感じの人物が多い。恐らく、これは早天祈祷を行なっているか否かによって醸成されてきたものである。そしてこのことは当然、両国のキリスト教の発展の差として結果することになった。

ほぼ同じ頃、即ち今から百三、四十年前に両国のプロテスタント伝道は開始されたが、日本ではカトリックも含めて人口の約一パーセントがクリスチャンとなつていくが、一方韓国では約三十パーセントがクリスチャンになった。何故このような較差をもたらしたかについては、様々な理由が考えられ、単純に一つの理由で割り切れることは難しいのであるが、その有力な理由の一つが早天祈祷にあることは疑いない。

韓国ではキリスト教が伝えられた当初から、クリスチャンになることは朝早く起きて教会に行つて祈ることだという伝統が培われていた。しかし日本ではそのような伝統は生まれなかった。何故、日本では生まれず韓国では培われたのか。その辺の歴史神学的考察は大変興味のあるところであるが、今はそのことについては触れない。要するに、永々と早天祈祷を行なってきた結果、韓国教会はあれ程の繁栄と祝福を得たことに、私達は注目しなくてはならないであろう。

それでは、どうして早天祈祷は

それ程迄に効果があるのであるか。この点について、ウオッチマンニーは次のように語っている。「一日の他のときの祈りは早天の祈りに比較することはできません。そして彼の主との交わりに、明け方のような甘美の瞬間は、他に決してありません。一日の最上の時を神にささげるべきであります。人々やこの世の事にささげてはなりません。丸一日をこの世で過ごし、それから夕方たくたになつた時、寢床につく前に祈り、聖書を読むためにひざまずく者は愚か者です。その祈り、その聖書研究、その主との交わりが、欠点あるといつて誰が驚くでしょう。彼の問題は朝あまりにも遅く起きることの問題です」(「キリスト者の基本的な知識と経験」第一巻「生きた供え物」)。

ここでウオッチマンニーは、同じ祈りでも、早天の祈りと日中の祈り、あるいは晩に祈る祈りとでは、雲泥の差が生じてくることを指摘している。確かに、私の経験からもそのように言うことができる。早天の祈りとその他の時の祈りとは、そのもたらすものは二倍あるいは三倍以上の差が生まれているように思える。つまり、早天の祈りは二倍あるいは三倍の早さで祈りを実現していく不思議な力を持っているのである。何故、そのような力が早天祈祷には秘められているのであろうか。その点については、次回に詳述したい。